

第12期県民生活審議会 第4回県民生活部会

1. 日 時 令和2年7月3日（金）14：00～16：00
2. 場 所 兵庫県民会館 12階 1202会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、小西部会長、岩木委員、高岸委員、田端委員、千葉委員、野崎委員、宮定委員、山口委員、山下委員、吉岡委員
県側：松森県民生活部長、高永県民生活局長、岩原県民生活課長、宿南参画協働・ボランティア活動支援班長
4. 議 事
 - (1) 「令和元年度参画と協働関連施策の年次報告」について
 - (2) 第12期県民生活審議会提言「多様な力が集まる“住民主体の地域づくり”の充実～参画と協働の更なる展開」について
 - (3) その他

5. 主な内容

【「令和元年度参画と協働関連施策の年次報告」について】

*年次報告の構成はこういった形で問題ない。新規事業を中心に掲載していることは、非常にいいことだが、事業の実績に係る評価や事業へ参加した方の感想なども記載されていけば更によい。

*県民の方々に参画・協働をしてもらわなければならないとか、してもらうことがとても大切だという、参画と協働の初期、参画と協働をがんばろうという時期ではなくなっている。価値観が変わってきて、参画と協働が当たり前になっている現状があるので、可能であるならば近い将来の方向性が見えた方がよい。

【第12期県民生活審議会提言「多様な力が集まる“住民主体の地域づくり”の充実～参画と協働の更なる展開」について】

○提言が想定する範囲

*県民生活審議会が対象にしているのは、どのくらいのスパンであるのかということ認識して審議を行う必要がある。検証することができないぐらい大きな話は大学がやればよい。審議会で議論するのは、過去を踏まえて、少し先の話がどうなんだという辺りが中心になってくるものと認識している。

○理解しやすい表現

*地域との関わりがある方などは、この提言を読めば概ね理解できると思うが、そうした活動をされていない方に対しては、もう少しかみ砕いて記載しないとわかりにくいのではないか。

○地域の捉え方

*都市部と山間部で違いがあるものの、少なくとも都市部では、従来の地域政策の基本単位である小学校区よりも、もう少し大きなエリアで地域を捉えなおす必要があるのではないか。

*地域や地域社会という言葉が多く出てくるが、どういうイメージで書いているかはどこにも記載されていない。いろんな地域があるのではっきり定義するのは困難である。

*地域というのは柔軟に考える必要があることから、文脈に合わせて判断すべきである。書いている文脈によって地域の意味が広がったり、狭くなったりするので、はっきりと定義しない方がよい。

○地域活動を行う個人への対応

*トレンドで近い将来はこうだと言っているだけでは、対応できないほど社会の変化の幅が大きくなっている。だからこそ提言というからには、少し先の話も問題意識として出しておく必要がある。

*小学校区という大きな単位ではなくて、個人とか数人のグループであるとか、そうした小さい単位の参画と協働がすっぽり抜け落ちており、痩せ細っているところがある。特にコロナ時代になって個人がどういった対応するのか問われている時期でもある。組織対応ばかりするのではなく、個人が集まって組織ができていくという原点に立ち戻り、個人というものをどう捉えるかという視点が今後は重要になってくる。

*コミュニティという定義が出てきたのが50年ぐらい前で、個人を大事にしながらも、自分が属する組織を地域コミュニティというようになった。それに行政がのっかるような形で、法定外自治組織というような位置づけもされながら現在に至っている。長い期間でみると変革期にさしかかっているのではないかと認識している。

○地域活動の運営手法の抜本的な見直し

*地域活動のあり様について、後継者不足についてはこれまでのやり方を継続しようという風にしか考えていないので、後継者がいなくなるということが起こっている。こうしたことを踏まえると地域活動の進め方やあり方を根本的に考え直すことが必要だということをもう少しはっきりと記載する必要がある。

○自治体職員の地域活動への参加

*自治体職員のうち、特に都市部の職員は、仕事としてしか地域を見ていない傾向がある。職員自身がプレーヤーとして地域に関わることは重要なことである。その一

方で、地域担当制という制度があり、これはプレーヤーではなくファシリテーターとして関わるもので、それぞれを別の項目として、切り分けて記載していただきたい。

*地域担当制という制度自体はすごい大事だと認識している。自治体職員が担当になると、ほったらかす人もいれば、自分がプレーヤーとなってがんばる人もいる。地域を支援するというのはどういうことなのか、担当となる職員の理解を進めることが重要である。

○今後の社会像

*情報化社会の進展について記載しているが、インターネットというツールの利用者については書かれているものの、例えばスマホでの決済や Facebook での発信など、どのように使われているかについては書かれていない。情報化社会の次は個人評価社会だと言われている。今後、個人評価社会に入っていくことになると思うが、それを牽引する1つがインターネット社会である。

○ポストコロナ社会に係る議論

*これまで地域社会や県民のことを真剣に考えながら議論してきたが、最近、政府や地方自治体が言っている今後の社会の動きやポストコロナ社会の在り方についても、意図していなかったが議論ができています。ポストコロナ社会ということで、これまでの議論がぷちんと切れるのではなくて、かなり引き継ぐことが可能であるという印象を持った。